

第一回 WEB 国際会議（2011 年 10 月 15 日開催）
～大西客員研究員からのカンブシュネル教授への特定質問～

村上先生 ありがとうございます。Mathesis universalis について、これまでカンブシュネルさんから伺ったことのない豊かな内容を展開して下さったと思います。それから、Mathesis universalis を人間についてどういうふうに応用していくのかということの大きな示唆も与えて下さったと思います。

大西さんのほうから少しご質問いただきたいと思います。

大西先生 カンブシュネル先生に私がまず申し上げたのは、彼の発表内容がフランスのデカルト研究の中でも全く今まで誰も言わなかったこと、つまり、Mathesis universalis ということとモラルをつなげるということは、新たな試みだったということです。

カンブシュネル先生は、方法の起源に Mathesis を見て両者をつなげて読まれているわけですが、それをさらにモラルともつなげている。では、モラルだけなのか。すなわち、形而上学の問題はどうなっているのかということをお伺いしました。ある種の深慮と言いますか、慎重さを求めるということは、例えば「第四省察」の中で、意志というものが知性の外に広がっていかないように気を付けるという誤りを回避するための方法ですけれども、そこに、例えば現れているのではないかということが私からの質問です。この質問は、一般にデカルトにおける形而上学とモラル、道徳ということになるわけですが、それは横にいる村上先生が、あとで掲げることになると思いますので、私の質問はカンブシュネル先生が最後のほうに示された、慎重さを求めるという、一種の règle、それが méthode の中心であるわけですが、その適用範囲の問題ということになります。

カンブシュネル先生

（通訳なし・カンブシュネル先生のお応えの内容は大西先生が要約なさいました）

（カンブシュネル先生のお応え）

大西先生 prudence（慎重さ）ということについて伺ったわけなんですけれども、慎重さを保持するためにデカルト哲学の中には常に2つの方向性というか、要素がある。一つは、決意、大胆さということ。そして、それに加わって、希望ということ。つまり、何か新たなものを発見するとか、新たな行為に乗り出すとか、その場合のプラス、ポジティブな側面と、それと同時に、誤ってはいけないということに対する不安というか、恐れ。この両者がない交ぜになっている。そのことは、『省察』、つまり、優れて形而上学の場合にも当てはまることであろうと。

そして、**Mathesis** なんですけれども、**Mathesis** 自体、カンブシュネル先生がお話くださった意味での **Mathesis** 自体が、そのまま形而上学に当てはまるとは考えがたい。むしろそれが形而上学に当てはまるためには、**méthode** (方法) にならなければならないというお返事でした。

カンブシュネル先生自身のお話の中にもありましたが、何を知らなければならないかを知るとのこと。これがデカルト哲学全体を貫くプロトコルになるわけですが、その点では、『省察』、つまり形而上学でも同じことである。ただ、今はこれ以上この点には立ち入れない。『省察』のプロトコルというのが、行動一般のプロトコルとどう違うのかということは非常に繊細で、かつ極めて限定された、最も難しい問題であるからということでした。

村上先生 ありがとうございます。それでは、またご質問したり、討論したりすることにいたします。今度はシュテンガーさんにお話を伺いたいと思います。シュテンガーさん、よろしくお願いいたします。